

基本計画書

基本計画									
事項	記入欄								備考
計画の区分	研究科の専攻に係る課程の変更								
フリガナ設置者	コウリツダイガクホウジンコウリツコマツダイガク 公立大学法人公立小松大学								
フリガナ大学の名称	コウリツコマツダイガクダイガクイン 公立小松大学大学院 (Graduate School, Komatsu University)								
大学本部の位置	石川県小松市四丁町ヌ1番地3								
大学の目的	公立小松大学大学院は、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めて、又は高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展と産業の振興に寄与することを目的とする。								
新設学部等の目的	南加賀および北陸に軸足を置き、アジアを中心とした国際文化研究と連動させ、専門知識の深化と普遍的な思考、さらには分野を超えた専門的なスキルを有する人材を社会に送り出す。同時に、地域・国際課題を発見し、それを横断的・複眼的な視点から解決を試み、エンシカルな行動様式を意識しながら、地域を活性化できる人材育成をめざす。								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	取容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	国際文化交流学部 国際文化交流学科 サステイナブルシステム科学研究科グローバル文化学専攻（修士課程） 14条特例の実施
	サステイナブルシステム科学研究科 (Graduate School of Sustainable Systems Science) グローバル文化学専攻博士後期課程 (Doctoral Course of the Division of Glocal Cultures) 計	3年	1人	—人	3人	博士(国際文化学) (Doctor of Philosophy in Intercultural Studies)	令和6年4月 第1年次	石川県小松市土居原町10番地10	
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)		サステイナブルシステム科学研究科 生産システム科学専攻（博士後期課程）令和5年3月（研究科の専攻に係る課程の変更認可申請） ヘルスケアシステム科学専攻（博士後期課程）令和5年3月（研究科の専攻に係る課程の変更認可申請） 令和6年4月 サステイナブルシステム科学研究科生産システム科学専攻博士後期課程、ヘルスケアシステム科学専攻博士後期課程、グローバル文化学専攻博士後期課程の開設に合わせて現在の修士課程を博士前期課程に改める							
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
	サステイナブルシステム科学研究科 グローバル文化学専攻博士後期課程	講義	演習	実験・実習	計	18 単位			
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等	
	新設	サステイナブルシステム科学研究科	9人	8人	1人	0人	18人	0人	13人
		グローバル文化学専攻博士後期課程	(9)	(8)	(1)	(0)	(18)	(0)	(13)
		生産システム科学専攻博士後期課程	12人	5人	0人	0人	17人	0人	16人
		ヘルスケアシステム科学専攻博士後期課程	(12)	(5)	(0)	(0)	(17)	(0)	(16)
	既設	計	35人	15人	1人	0人	51人	0人	—人
			(35)	(15)	(1)	(0)	(51)	(0)	(—)
	既設	サステイナブルシステム科学研究科	8人	6人	0人	0人	14人	0人	27人
		生産システム科学専攻修士課程	(8)	(6)	(0)	(0)	(14)	(0)	(27)
		ヘルスケアシステム科学専攻修士課程	14人	3人	0人	0人	17人	0人	26人
グローバル文化学専攻修士課程		(14)	(3)	(0)	(0)	(17)	(0)	(26)	
計	計	29人	17人	1人	0人	47人	0人	—人	
		(29)	(17)	(1)	(0)	(47)	(0)	(—)	
合計		37人	17人	1人	0人	55人	0人	—人	
		(37)	(17)	(1)	(0)	(55)	(0)	(—)	

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計	大学全体				
	事 務 職 員		39 人 (39)	1 人 (1)	40 人 (40)					
	技 術 職 員		1 (1)	1 (1)	2 (2)					
	図 書 館 専 門 職 員		3 (3)	0 (0)	3 (3)					
	そ の 他 の 職 員		3 (3)	0 (0)	3 (3)					
	計		46 (46)	2 (2)	48 (48)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計	大学全体				
	校 舎 敷 地	23,496.11㎡	0㎡	0㎡	23,496.11㎡	校地 末広キャンパス 借用面積：3,676㎡ 借用期間：25年				
	運 動 場 用 地	14,271.00㎡	0㎡	0㎡	14,271.00㎡	校舎 末広キャンパス 借用面積：930㎡ 借用期間：25年 中央キャンパス 借用面積：4,030㎡ 借用期間：25年				
	小 計	37,767.11㎡	0㎡	0㎡	37,767.11㎡	小松市ビジネス創造プラザ 借用面積：175㎡ 借用期間：1年毎に契約更新を行う				
	そ の 他	8,173.07㎡	0㎡	0㎡	8,173.07㎡					
	合 計	45,940.18㎡	0㎡	0㎡	45,940.18㎡					
校 舎		専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計	大学全体				
		17,427.45㎡ (17,427.45㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	17,427.45㎡ (17,427.45㎡)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体				
	22 室	8 室	25 室	0 室 (補助職員 0人)	0 室 (補助職員 0人)					
専任教員研究室		新設学部等の名称		室 数		大学全体				
		サステイナブルシステム科学研究科 グローバル文化化学専攻博士後期課程		18 室						
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 種	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体		
	サステイナブルシステム科学研究科 グローバル文化化学専攻 博士後期課程	66,760 [2,520] (66,000 [2,230])	1,987 [1,924] (2,583 [2,520])	1,920 [1,920] (2,516 [2,516])	2,010 (1,970)	1,640 (1,040)	111 (111)			
	計	66,760 [2,520] (66,000 [2,230])	1,987 [1,924] (2,583 [2,520])	1,920 [1,920] (2,516 [2,516])	2,010 (1,970)	1,640 (1,040)	111 (111)			
図書館		面積	閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数		大学全体			
		909.83 ㎡	118		80,000					
体育館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要							
		960.00 ㎡	—							
経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	研究科単位での算出不能なため、学部との合計 図書費には電子ジャーナルデータベースの整備費（運用コストを含む）を含む。 ※①は市内学生②はその他学生
		教員1人当り研究費等 グローバル文化化学専攻博士後期課程		300千円	300千円	300千円	—	—	—	
		共同研究費等		8,000千円	8,000千円	8,000千円	—	—	—	
		図書購入費	7,650千円	7,650千円	7,650千円	7,650千円	—	—	—	
		設備購入費	51,000千円	3,000千円	3,000千円	3,000千円	—	—	—	
	学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
		①868 ②1,009千円	586千円	586千円	— 千円	— 千円	— 千円			
学生納付金以外の維持方法の概要			大学運営費交付金、資産運用収入、雑収入 等							

大 学 の 名 称		公立小松大学							
既設大学等の状況	学 部 等 の 名 称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
		年	人	年次人	人		倍		
	生産システム科学部 生産システム科学科	4	80	—	320	学士（工学）	1.05 1.05	平成30年度	石川県小松市四丁町又1番地3
	保健医療学部 看護学科	4	50	—	320	学士（看護学）	1.04 1.02	平成30年度	石川県小松市向本折町へ14番地1
	臨床工学科	4	30	—	120	学士（臨床工学）	1.07	平成30年度	
	国際文化交流学部 国際文化交流学科	4	80	—	320	学士（国際文化学）	1.01 1.01	平成30年度	石川県小松市土居原町10番地10
	サステイナブルシステム科学研究科 生産システム科学専攻（M）	2	15	—	15	修士（工学）	1.07	令和4年度	石川県小松市四丁町又1番地3
	ヘルスケアシステム科学専攻（M）	2	3	—	3	修士（保健学）	1.33	令和4年度	石川県小松市向本折町へ14番地1
	グローバル文化学専攻（M）	2	3	—	3	修士（国際文化学）	1.00	令和4年度	石川県小松市土居原町10番地10
附属施設の概要		該当なし							

教育課程等の概要															
(サステイナブルシステム科学研究科 グローカル文化学専攻博士後期課程)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
研究科共通科目	SDGsと社会のガバナンス	1前	1			○			1					兼7	オムニバス・メディア
	人類の持続的発展の科学	1前	1			○			2					兼6	オムニバス・メディア
	国際・地域特別実習	1後～2前・集中※	2					○	8	8	1				
	小計（3科目）	—	4	0	0	—			9	8	1			兼12	—
専攻専門科目	国際文化学特論A	1後		2		○			1	3					オムニバス・共同（一部）
	グローバル文化学特論A	1後		2		○			2	1					オムニバス
	国際文化学特論B	2前		2		○				2	1				オムニバス
	グローバル文化学特論B	2前		2		○			1	2					オムニバス
	南加賀・北陸文化資源学特論	2後		2		○			1	1				兼2	オムニバス・メディア
	小計（5科目）	—	0	8	0	—			5	8	1			兼2	—
特別研究科目	特別研究	1～3通	12				○		8	8	1				
	小計（1科目）	—	12	0	0	—			8	8	1				—
合計（9科目）			—	16	8	0	—		9	8	1			兼13	—
学位又は称号	博士(国際文化学)		学位又は学科の分野				文学関係、社会学・社会福祉学関係								
卒業要件及び履修方法								授業期間等							
<p>修了要件は、本研究科グローバル文化学専攻博士後期課程に原則として3年以上在学し、研究科共通科目4単位、専攻専門科目2単位以上、特別研究科目12単位の計18単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、博士論文を提出しその審査及び最終試験に合格した者に学位を授与する。</p> <p>※国際・地域特別実習の実施時期：1年の夏季休業期間から2年の前期までの1年以内とし、集中的に実施する場合は夏季休業期間中など他の科目履修の支障とならない期間とする。通期的に実施することができる場合は半期（1セメスター）を通して実施することもできる。</p>								1学年の学期区分			2学期				
								1学期の授業期間			15週				
								1時限の授業時間			90分				

教 育 課 程 等 の 概 要

(サステイナブルシステム科学研究科 グローカル文化学専攻博士後期課程)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
研究科共通科目	SDGsと社会のガバナンス	1前	1			○			1					兼7	オムニバス・メディア
	人類の持続的発展の科学	1前	1			○			2					兼6	オムニバス・メディア
	小計(2科目)	—	2	0	0	—			3					兼12	—
合計(2科目)		—	2	0	0	—			3					兼12	—
学位又は称号	博士(国際文化学)		学位又は学科の分野			文学関係、社会学・社会福祉学関係									
卒業要件及び履修方法						授業期間等									
修了要件は、本研究科グローバル文化学専攻博士後期課程に原則として3年以上在学し、研究科共通科目4単位、専攻専門科目2単位以上、特別研究科目12単位の計18単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、博士論文を提出しその審査及び最終試験に合格した者に学位を授与する。						1学年の学期区分			2学期						
						1学期の授業期間			15週						
						1時限の授業時間			90分						

教育課程等の概要

(サステイナブルシステム科学研究科 グローカル文化学専攻博士後期課程)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専攻専門科目	国際文化学特論A	1後		2		○			1	3					オムニバス・共同(一部)
	グローバル文化学特論A	1後		2		○			2	1					オムニバス
	国際文化学特論B	2前		2		○				2	1				オムニバス
	グローバル文化学特論B	2前		2		○			1	2					オムニバス
	南加賀・北陸文化資源学特論	2後		2		○			1	1					兼2 オムニバス・メディア
	小計(5科目)	—	0	8	0	—			5	8	1			兼2	—
特別研究科目	特別研究	1~3通	12				○		8	8	1				
	小計(1科目)		12	0	0	—			8	8	1				—
合計(13科目)		—	12	8	0	—			8	8	1			兼2	—
学位又は称号	博士(国際文化学)		学位又は学科の分野				文学関係、社会学・社会福祉学関係								
卒業要件及び履修方法						授業期間等									
修了要件は、本研究科グローバル文化学専攻博士後期課程に原則として3年以上在学し、研究科共通科目4単位、専攻専門科目2単位以上、特別研究科目12単位の計18単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、博士論文を提出しその審査及び最終試験に合格した者に学位を授与する。						1学年の学期区分			2学期						
						1学期の授業期間			15週						
						1時限の授業時間			90分						

授 業 科 目 の 概 要			
（サステイナブルシステム科学研究科 グローカル文化学専攻修士後期課程）			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科共通科目	SDGsと社会のガバナンス	<p>（概要） 社会の持続的発展を維持するために必要な様々な施策は、国際間の合意から地方政府や個別企業での取り組みまで、種々の階層を通して提案、合意、実施のプロセスを経ることになる。そこには、国・地方政府・大学・企業等の機関統治の問題、そして市民・専門職業人・研究者としての社会的責任の問題がある。また、それらの間の倫理観の相克、例えば個人対社会（組織）、組織対組織、ローカル対グローバル、現在世代対未来世代という対峙が不可避的に発生する。このような問題を共時的、通時的、汎通的に、どのように止揚すべきかについて、具体的問題を例にして組織のガバナンスと個人のエシックスについて議論を深め、互いの立場を展望できる力を養う。</p> <p>（オムニバス方式／全8回）</p> <p>（24 林 勇二郎／1回）：2つの研究科共通科目（「SDGsと社会のガバナンス」、「人類の持続的発展の科学」）のめざすもの 2つ研究科共通科目を設定するに至った議論を総括し、人類の持続的発展の諸課題を明らかにする。また、これらの諸課題解決に向けた社会的ガバナンスと学際的アプローチを探る。</p> <p>（25 矢部 彰／1回）：持続的発展のための新技術開発とそれらの社会的受容—デルファイ調査からの提言 新規な技術の実用化には、技術の開発とその社会実装という二つのステップを踏む。デルファイ調査から見えてきた新技術の社会実装上の諸課題について述べる。</p> <p>（21 高山 純一／1回）：公共交通システムの存続と廃止—住民と行政の狭間 現代社会の発展は公共サービスの普及をもたらしたが、その発展が地域社会の存続を危うくしている。地域社会が存続する上で必要条件となる公共交通システムの存廃の決定プロセスについて考える。</p> <p>（23 盛永 審一郎／1回）：SDGsの哲学的基礎付けについて Brundtlandレポートの「将来の世代が必要とするものを損なうことなく、現在の世代の要求を満たすような開発が行われる社会の実現を目的」という命題を、ヨナスの定言命法「あなたの行動の結果が地球上の真の人間の生命の継続性と一致するように行動せよ」から解釈する。</p> <p>（22 山本 博／1回）：医療における科学、倫理と危機・安全管理 医療の進歩が今日の長寿社会をもたらしたが、その一方で、健康寿命や医療のあり方が問われている。進歩が著しい医療科学における科学研究と研究者の倫理意識、および医療現場における危機・安全管理について論じる。</p> <p>（26 高橋 泰／1回）：非常時の医療提供体制—コロナが示した医療の課題 新型コロナウイルス感染症のパンデミックが、グローバル社会の非日常と日常の概念を揺るがせている。世界的パンデミックに直面した社会で明らかになった、非常時における医療崩壊を防ぐための医療体制の諸課題について述べる。</p> <p>（1 横川 善正／1回）：美学が果たす社会的役割 人間心理の奥に潜む「美意識」の有する類なき社会的融和力について具体例を挙げ、倫理観の相克、社会分断の解決策の鍵となり得ることを述べる。</p> <p>（27 Adrian Bejan／1回）：Sustainable Society and the Constructal Law （日本語訳：新たな物理法則である「コンストラクタル法則」に基づき、持続的社會が具備すべき普遍的構造と特性について論じる。）</p>	オムニバス方式・メディア
	人類の持続的発展の科学	<p>（概要） われわれの存在する世界が直面している課題を、「地球自然システム科学」、「グローバル政治・経済システム科学」、「地域社会システム科学」の3つの括りの中で捉え、それらが抱える、または未だ顕在化していない課題について検討を行う。「地球自然システム科学」においては地球の長期環境変動を視野に近年の温暖化、化学物質による環境汚染などの科学的側面に注目して考える。「グローバル政治・経済システム科学」においては、国家間の格差と分配、社会の分断、グローバル化における危機管理などの諸問題を文化・政治学的観点からとらえる。「地域社会システム科学」においては（北陸）地域が抱える特徴的問題である保健・医療・福祉、地域資源を活用した産業（新しい観光など）、中山間部集落の消滅などの諸課題への超学際的協働による解決可能性について考究する。</p> <p>（オムニバス方式／全8回）</p> <p>（31 Andrew Woods／1回）：Geophysical Systems and Their Evolution （日本語訳：自然としての地球システムの短期的および長期的営みについて例を挙げて論じる。）</p> <p>（19 木村 繁男／1回）：生物圏における環境流体の運動と汚染の拡散 環境流体の代表である、河川水、湖沼、地下水および大気の運動の概要とそれに伴う熱・物質の移流拡散について述べる。</p> <p>（28 弓取 修二／1回）：持続的発展に必要な新しい科学技術の開発 国が推進するカーボンニュートラルに関する科学技術開発の進捗と将来について述べる。</p> <p>（21 高山 純一／1回）：地域社会の持続的発展と交通システムの果たすべき役割 持続可能な地域づくりの在り方を交通システムを核として、そのコンパクト化、スマート化そしてレジリエントなインフラについて考える。</p> <p>（29 加藤 浩晃／1回）：持続的社會と医療DX AI医療機器の開発とその遠隔医療への応用、医療行為全般へのAI技術の応用などのデジタルヘルスの社会実装について論じる。</p> <p>（30 佐藤 大介／1回）：地域社会の持続的発展と遠隔医療の役割 過疎化地域、独居老人、災害被災者などへの遠隔医療適用例を述べ、その社会的効果について論じる。</p> <p>（⑥ 中村 誠一／1回）：歴史の変遷を踏まえた中南米社会の政治と文化 中南米社会が歩んできた歴史を紐解き、その文化的特徴の源泉を明らかにし、そこから生まれた政治システムについて論じる。</p> <p>（④ 鍾 以江／1回）：地政学的に見る東アジアの動向 東アジアの言語、文化、歴史について概観し、現在進行しつつある東アジア全体の地政学的諸事象について論じる。</p>	オムニバス方式・メディア

研究科共通科目	国際・地域特別実習	<p>(概要) フィールドワークを通じたケーススタディ及びインターンシップを実施し、国際・地域課題を現地で直接的に又はオンラインにより観察し、課題解決のための方策を考える。必要に応じて遠隔システムを効果的に利用し、実効性のあるケーススタディやインターンシップの実施を図る。</p> <p>実施時期：特別な事情のない限り、原則1年の夏季休業期間から2年の前期までの1年以内とし、集中的に実施する場合は夏季休業期間中など他の科目履修の支障とならない期間とする。通期的に実施することができる場合は半期(1セメスター)を通して実施することもできる。本実習は課題解決型であり、入学後から実習開始までの間に担当教員とも相談し、実習内容により、集中的にインターンシップを実施したり、定期的に(一週間に一度など)通い、長期間のインターンシップを実施したりするものとする。</p> <p>実施機関：本学近隣の企業、行政機関、もしくは本学の海外オフィス(米国シリコンバレー、中米グアテマラ・ホンジュラス他)、ホンジュラス国立人類学歴史学研究所及び協定校等とする。実施機関の選定にあたっては、入学後から実習開始までの間に担当教員から指導や助言を受けながら、個々の学生の将来のキャリアや研究テーマを踏まえ、候補を絞り込み、最終的には学生の希望を確認し、実施機関を決定する。</p> <p>対象となる学生の要件：主に異文化交流に深い関心を有し、現場に即した課題の発掘と解決への道筋を追求する意欲をもつ。学生は、関連する企業等の受け入れ機関と実施内容について自主的に綿密な打合せを行う。実施後、報告会を行いその成果を報告する。報告会では実習の結果報告にとどまらず、実習先が抱える課題とその解決策について発表することとし、担当教員による成果の確認を行うとともに、その成果をどのように発展させていくのかについて指導を行う。</p> <p>指導内容・体制：国内外で現場に即した課題の発掘と解決への道筋を探り、専攻の垣根を超えた新しいコラボレーションの可能性も追求する。学生は、担当教員から指導や助言を受けながら、自立的に研究課題に適した企業・機関等を選択し、指導教員及び出先企業等の担当者とも連携する。また、事前研修において、実習の目標を明確に設定する。さらに、実習実施内容のモニタリングについては、毎回の実習後に業務日誌等を作成・提出させることで、実習の実施状況や進捗状況を担当教員が確認する。一定の期間(通常は5回の実習)毎に行うカンファレンスにおいては、実習内容の方向性について、受け入れ機関と担当教員が協調して指導していく。最終的な評価は、実施機関からの評価も参考にし、担当教員が行う。</p> <p>実習機関の選定にあたっては、学生のキャリアパスに則して以下のようなガイドラインを参考として、指導教員と協議の上決定する。 ・専攻分野を活かしたアントレプレナーを目指す。 米国シリコンバレーオフィス(平成30年度開設) ・地域振興に貢献する (株)コマツをはじめ約320社の地域の協力企業、各種法人、近隣の自治体およびその関連施設。 ・専攻分野の教育・研究者を目指す 金沢大学、中米マヤ文明遺跡内にあるグアテマラ・ホンジュラスの本学オフィス、ホンジュラス国立人類学歴史学研究所、カンボジア・クメール文明遺跡、協定校であるマレーシアのラーマン大学、タイのプリンスオブソククラ大学、台湾の建国科技大学</p>	
専攻専門科目	国際文化学特論A	<p>(概要) 英語と中国語の諸相を知り、その背景にある当該文化圏の文化を日本文化の視点も含めてより深く理解するための演習を行う。そのために、言語学や文学などを切り口とし、研究上の諸問題と最先端の研究課題について、理論や研究成果、統計データを用いて考察する。また、こうした学習の過程で当該言語の特性を理解することにより、高度な外国語運用能力を体得する。本科目は、修士課程の「言語文化特論A」(英語文化圏)や「言語文化特論B」(漢字文化圏)との連続性を有し、研究者としての具体的な研究力の発信と言葉の諸相についての一定のメッセージを社会に還元する時期となる。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(15) 長辻幸・(14) Dennis Wayne Harmon II・(16) 橋本貴子・(2) 小原文衛/1回(共同) 本科目に通底する研究上の視点、分析に対して必要とされる作業、研究姿勢についての議論を行う。</p> <p>(15) 長辻幸/3回 英語学の中でも語用論に関連する領域を取り上げ、最新の研究動向に目を向けながら、研究者として自立した言語研究が遂行できるようになるための技能を修得する。授業では、学術雑誌等に掲載されている指定論文を予め講読しておき、受講者全員で論文の内容について議論する。特に、問題提起、データ分析、考察の方法に重点を置いて検討し、領域を俯瞰する大局的な視点から当該研究の位置づけを行う。</p> <p>(16) 橋本貴子/3回 漢字文化圏における言語文化交流史の基本的な流れ、資料、研究方法、研究概況について講義する。資料の成立背景、編纂過程、受容状況、反映される言語的特徴を整理し、特に言語交流および文化的側面に着目して歴史的観点からの考察を行う。</p> <p>(15) 長辻幸・(16) 橋本貴子・(2) 小原文衛/1回(共同) 第2回から第7回までの講義の総括として、受講生に言語学的・言語文化交流史的視点から自身の研究対象を分析・考察した発表を行ってもらい、その内容について博士前期課程学生を含め多様性を有する構成員により全員で議論し、講義で学んだ諸知見を将来の特別研究へ発展的につなげる可能性を追求する。</p> <p>(14) Dennis Wayne Harmon II/3回 During these classes there will be an examination of the concept of what it means to be American, from an understanding of Social Identity Theory (SIT). This will be followed by looking into a practical use of SIT theory in potential research in Japan. (日本語訳：この授業では、社会的アイデンティティ理論(SIT)の理解から、アメリカ人であることの意味について考察する。その後、SIT理論の日本での実践的な研究活用の可能性を探る。)</p> <p>(2) 小原文衛/3回 映画技法論用語、映画脚本の構造、映画史についての考察を行い、アメリカ映画に内在する文化的・社会的コンテキストを抽出するためのメディアリテラシーを涵養する。また、アメリカ史と映画の関係性の分析の分析を通して、アメリカの集団意識に内在する基本的な思考のパターンと文化的アイデンティティを析出する作業も行う。</p> <p>(14) Dennis Wayne Harmon II・(2) 小原文衛・(15) 長辻幸/1回(共同) 第9回から第14回までの講義の総括として、受講生に哲学・メディア研究の視点から自身の研究対象を分析・考察した発表を行ってもらい、その内容について博士前期課程学生を含め多様性を有する構成員により全員で議論し、講義で学んだ諸知見を将来の特別研究へ発展的につなげる可能性を追求する。</p>	オムニバス方式・共同(一部)

専攻専門科目	グローバル文化学特論A	<p>(概要) 「グローバル文化学特論A」では、「経済」、「文化人類学」、「考古学」をキーワードとして、海外の事例を十分踏まえうえて、新産業を生み出す地域社会システム、観光地で生産され消費される文化イメージ、文化資源学による世界遺産の保存と活用等の諸問題に向き合い、先端的な理論を用いて課題解決のための考察を行う。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>⑫ 清 剛治／5回 産業地域における課題解決へ、新産業を生み出す地域社会システムの創造による視角から考察を進める。グローバルにミクロ・マクロの両面から多角的に影響を受ける産業地域に対し、イノベーション創出をどのように実現し得るのかについて深化させる。</p> <p>⑬ 杓谷 茂樹／5回 マスツーリズムの展開を通して観光地で生まれる諸問題について批判的な議論をすすめる。</p> <p>⑭ 中村 誠一／5回 受講生自身が現地フィールド調査を行い、そこで確認・収集した一次資料や独自の観点を、世界遺産を含む文化遺産の保存と活用のための手法として、どのようにすれば実践的に活用でき、また社会実装につなげられるかを考察し、グループで議論し深化させる。</p>	オムニバス方式
	国際文化学特論B	<p>(概要) 本講義では、グローバル化に伴う政治経済上の変化を、非欧米圏の国々（とくに中東、旧ソ連、東南アジアに位置する国々）の事例から考察するとともに、そうした地域が直面する課題を解決するために、いかなる分析手法や研究アプローチが有効なのかを検討する。単なる事例研究に留まるのではなく、そこから一歩進んで、ディンプリン（政治学、経済学、人類学、メディア研究など）と地域をめぐる研究の間にある溝を理解し、両者の横断や架橋を目指すものである。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>⑮ 千葉悠志／5回 グローバル化に伴う政治経済上の変化を、中東の国々の事例から考察するとともに、それらが現在直面する課題は何か、その解決に向けて国際社会に何が求められるのかを検討する。同時に、その検討にあたっては主に政治学、社会学、地域研究を横断した学際的アプローチをとる。</p> <p>⑯ 一ノ瀬忠之／5回 グローバル化に伴う政治経済上の変化を、旧ソ連を構成した国々の事例から考察するとともに、それらが現在直面する課題は何か、その解決に向けて国際社会に何が求められるのかを検討する。同時に、その検討にあたっては主に経済学、地域研究を横断した学際的アプローチをとる。</p> <p>⑰ 西島薫／5回 グローバル化に伴う政治経済上の変化を、東南アジアの国々の事例から考察するとともに、それらが現在直面する課題は何か、その解決に向けて国際社会に何が求められるのかを検討する。同時に、その検討にあたっては人類学、政治学、地域研究を横断した学際的アプローチをとる。</p>	オムニバス方式
	グローバル文化学特論B	<p>(概要) 「グローバル文化学特論B」では、「観光」、「多文化共生」、「心理学」をキーワードとして、地域観光の促進とそれに伴う地域の再生、地域づくりに焦点をあてるものである。地域観光の促進に必要な市民力、社会の分裂回避のための方策、環境適応と行動変容に関する心理学的アプローチ等に焦点をあて、先端的な理論を用いて、課題解決のための考察を行う。本科目は、修士課程の「地域資源学特論B」や「多文化共生社会特論B」、「コミュニケーション特論」との連続性があり、本科目において、研究者としての具体的な提言を観光学的視座から行なうものである。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>⑱ 中子富貴子／5回 グローバル化した現在の社会では、その影響により地域社会で発生する課題、ローカルな諸問題が多様で複雑になっており、従来の視点では読み解けない様相を示している。この点を観光や交流、社会関係資本といった視点から掘り下げ考察する。</p> <p>⑲ 朝倉由希／5回 日本の在留外国人数は増加を続けている。多文化共生という行政用語が登場して20年が経とうとする現在も、その理念は十分に浸透しておらず、実態は多くの課題を抱えている。国籍のみならず、様々な面で、マイノリティとマジョリティの格差を廃し、多様な文化的背景を持つ人々が共に生き、その多様性を地域発展に結びつけてく発想が、現在の日本で強く求められている。包摂的な社会の実現に向けた課題と展望を討議する。</p> <p>⑳ 木村誠／5回 地域住民および地域への訪問者を取り巻く環境とその課題について、心理学的な視点から解説する。生物・心理・社会 (Bio-Psycho-Social : BPS) モデルを基礎として、研究対象となる人々の特徴を明らかにする方法論を修得する。また、異文化接触と地域住民の幸福感に関する最新の理論を踏まえながら共生社会の実現に向けた課題とそれに対するリサーチクエスチョンを考察する。</p>	オムニバス方式

<p>専攻専門科目</p>	<p>南加賀・北陸文化資源学特論</p>	<p>(概要) グローカル文化学専攻の教員が生産システム科学専攻の教員と協働して学びを融合させ、南加賀および北陸地域の文化資源を、文化資源形成の歴史、文化資源と地域づくり、交通利用環境の向上戦略、ものづくりを題材とするデータ解析の実際、という四つの角度から検討する。地域の文化資源を社会的財産として捉え、地域創生に寄与する大きな文化政策を構想することをめざす。南加賀および北陸地域の課題は何かを明らかにし、先端的な理論と実践によって解決のための具体的な提言を行う。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(⑦ 西村 聡／5回) 南加賀の小松・大聖寺及び北加賀の金沢における文化資源形成の歴史と現状について講義する。能楽・歌舞伎・今様能狂言等、近世から現代に至る伝統芸能がこの地域でどのように継承され、地域の文化資源として認知・活用されてきたかを、地域の文献資料に基づき、鍵となる人物の事績をたどりながら、今後の振興と活用の方策を討議する。</p> <p>(⑨ 朝倉由希／5回) 地域創生における文化資源の役割や、近年の文化財保護政策の転換など、国全体としての政策動向を解説したうえで、北陸の様々な文化資源をどのようなストーリーでつなぎ発信し得るのか、実践的な方策について討議する。特に北陸に集積する工芸産地に焦点をあて、現代における工芸の意味や、各産地を広域的に連携して発信することの可能性について検討する。</p> <p>(21 高山純一／2回) 南加賀地域は、北陸新幹線の敦賀延伸によって、空港・新幹線・高速道路の利用が非常に便利となる。また、この地域は北陸有数の4温泉郷があり、日本人だけではなく、海外からの誘客にも非常に魅力的な地域である。ここでは交通利用環境の向上が広域観光・インバウンド誘客に及ぼす効果と魅力増強施策等について討議する。</p> <p>(20 上田芳弘／3回) 南加賀地域における加賀藩によるものづくり振興から始まる産業の歴史について、特に明治から昭和に掛けての建設機械や産業機械に係る製造業の発展、そして世界的に見ても特徴的なニッチトップ企業の最新動向についてデータを基に討議する。</p>	<p>オムニバス方式・メディア</p>
---------------	----------------------	---	---------------------

特別研究科目	特別研究	<p>(概要)</p> <p>国際文化という観点から、言語文化学、観光学、政治・経済学といった専門分野において、それらの先端的な理論と知識を駆使し、自立した研究者および教育者として、その分野の学問の深化と発展に貢献し、他分野の研究者とも連携・協働して研究を推進する方策を考える。</p> <p>また、本学が立脚する南加賀および北陸地域の自然・文化・歴史・政治・経済・観光などに関する諸課題を発見し、「総合知」を備え、地域と世界の抱える様々な問題に学際的アプローチを行ない、かつ、持続的可能な社会実現のため、組織の指導者として活躍できる方策を考える。これら一連のプロセスを通して、自立して研究を企画・実施する能力を培い、指導教員、副指導教員の指導のもとに博士論文の作成に取り組む。 (※は専門分野を超えた共同研究となる可能性をもつ研究)</p> <p>(① 岡村 徹) 言語接触・言語保持に関する理論的側面を取り上げ、社会言語学的視座から人類言語の諸問題を考える。</p> <p>(⑦ 西村 聡) 日本古典学の先端的な研究成果を踏まえ、古典の変容と新生の視点から能・狂言の作品解釈を更新する。また北陸特に南加賀地域における能楽・歌舞伎等の継承と文化政策との関係を検証する。</p> <p>(⑫ 清 剛治) ※ 地域社会の経済的発展へ向けて生じる諸問題を取り上げ、地域ステークホルダー、及び経済学者・経営学者と関係者が取り組むべき課題を選び、研究を計画・推進する。</p> <p>(⑨ 朝倉 由希) ※ 文化政策、文化資源学に関する理論と実践を往還した研究を深め、文化を基盤とした持続可能な社会づくりに必要な方策を検討する。</p> <p>(⑩ 橋本 貴子) 漢字文化圏およびその周辺地域に保存される音韻史関連資料について、最新の知見や関連諸分野の動向を踏まえながら、言語交流的視点および文化交流的視点に基づいた課題を設定し、研究を実施する。</p> <p>(⑥ 中村 誠一) SDGsターゲット11.4文化・自然遺産の保全を成し遂げるために必要不可欠である文理医融合の研究アプローチを用いて、マヤ文明の世界遺産遺跡(グアテマラ・ティカル国立公園、ホンジュラス・コパンのマヤ遺跡)で次世代型の考古学研究の創生に寄与する研究を展開する。</p> <p>(③ 杓谷 茂樹) マストリーズムの状況にある観光地域で、様々なまなざしの影響により、文化遺産が観光資源として再構築される現象を対象に、実践的な手法で研究を行う力を養う。</p> <p>(⑩ 一ノ渡 忠之) マクロ経済学及び貿易理論を踏まえつつ、貧困や経済格差、難民など現代世界経済が抱える諸問題を考える。</p> <p>(⑤ 中子 富貴子) ※ 観光の視点から、地域資源活用に利する組織運営、官民協働、あるいは住民と来訪者の交流のあり方を研究・考察する。</p> <p>(④ 鍾 以江) 日本と東アジアの歴史・文化・思想的諸問題を取り上げ、一国の枠を超えた分析視点と分野横断的な方法を用いて新たな人文的研究を行う。</p> <p>(⑮ 長辻 幸) 日英語の節連結等の様々な言語現象について、認知語用論の観点から通言語的・個別言語的特徴を解明し、意味論や語用論の領域への理論的貢献につなげる研究を行う。</p> <p>(⑬ 千葉 悠志) 現代中東・イスラーム地域における政治・経済・宗教をめぐる動向や、情報通信技術と社会との動態的関係を考える。</p> <p>(⑰ 西島 薫) 現代東南アジアにおける民主化と地域の動態に関する事例を分析し、当該地域の特色を理解することを目的とする。事例研究を通じて、政治、民主主義、権力や主権など概念を再検討する。とくに民主化期における地方政治と、伝統や在来の政体の関係に焦点を当てて研究する。</p> <p>(⑧ 島内 俊彦) ※ 語学学習者が直面する諸課題について、第二言語習得アプローチの基礎理論と最新の知見を参照しながら、学習者データを利用した応用的・実証的研究の指導を行う。</p> <p>(⑪ 木村 誠) 急速な社会環境の変化や異文化接触、および人間の多様性によって生じる心理学的諸問題を取り上げ、地域社会と心理学研究者が取り組むべき課題を研究する。</p> <p>(② 小原 文衛) 理論的研究(映画学)を基盤として、アメリカ映画を多角的に分析、アメリカ映画史の再構築及びアメリカ映画深層のコンテクスト(歴史・政治学・心理学)の解明に着手する。</p> <p>(⑭ Dennis Wayne Harmon II) I examine the impact of educational practices including student mobility (study abroad) and simulation-based learning projects affect student identity and concepts of self. (日本語訳: 学生のモビリティ(留学)やシミュレーション型学習プロジェクトなどの教育実践が、学生のアイデンティティや自己概念に与える影響について考察しています。)</p>
--------	------	--

公立大学法人公立小松大学 設置認可等に関わる組織の移行表

令和5年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和6年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
公立小松大学				公立小松大学				
生産システム科学部				生産システム科学部				
生産システム科学科	80		- 320	生産システム科学科	80		- 320	
保健医療学部				保健医療学部				
看護学科	50		- 200	看護学科	50		- 200	
臨床工学科	30		- 120	臨床工学科	30		- 120	
国際文化交流学部				国際文化交流学部				
国際文化交流学科	80		- 320	国際文化交流学科	80		- 320	
計	240		- 960	計	240		- 960	
公立小松大学大学院				公立小松大学大学院				
サステイナブルシステム科学研究科				サステイナブルシステム科学研究科				
生産システム科学専攻 (M)	15		- 30	生産システム科学専攻 (M)	15		- 30	
ヘルスケアシステム科学専攻 (M)	3		- 6	生産システム科学専攻 (D)	2		- 6	課程変更 (認可申請)
グローバル文化化学専攻 (M)	3		- 6	ヘルスケアシステム科学専攻 (M)	3		- 6	
				ヘルスケアシステム科学専攻 (D)	1		3	課程変更 (認可申請)
				グローバル文化化学専攻 (M)	3		- 6	
				<u>グローバル文化化学専攻 (D)</u>	1		3	課程変更 (認可申請)
計	21		- 42	計	25		- 54	